

フランス語の心理・感覚動詞の意味構造と

内的経験の事態認知パターンについて

川上 夏林

(京都大学大学院)

心理・感覚動詞、特に心理動詞は様々な理論的枠組みから考察されてきた。生成論的枠組みでは、意味役割と統語構造の間に強い結びつきがあると仮定されていたが、一部の心理動詞がその規則に反することから、その統語構造が問題となった。しかし、アスペクトの問題と関わる(1)~(4)のような事例に目を向けてみると、意味役割の観点からは説明することのできない現象があることがわかる。

- (1) a. Ces chaussures me blessent (# m'ont blessaient) aux talons.
b. Ses paroles ont blessé (# blessaient) Marie.
- (2) a. La beauté d'Ava Gardener a frappé(# frappe/ # frappait) Humphrey Bogart.
b. Il m'ennuyait (OK m'a ennuyé) un peu, mais je n'avais rien à faire et je n'avais pas sommeil.
- (3) a. C'est seulement quand il m'a déclaré : « Maintenant, tu es un vrai copain », que cela m'a frappé. (A. Camus, *ETRANGER*)
b. Je n'arrive pas comprendre et ça m'énerve. (R. Wataya, *APPEL DU PIED*)
- (4) a. Je m'énerve trop avec toutes ces choses.
b. * Il se blesse par cette nouvelle.
c. *Elle se heurte à ces idées.

事例(1)~(4)から窺うことができるように感覚的事態も含めた内的経験を表す動詞は、意味的・統語的振る舞いにばらつきがある。事例(1)は同じ動詞がだが、感覚的事態を表す場合(1a)と心理的事態を表す場合(1b)で、(非文法的でないにせよ)より自然に使われる時制に違いがあることがわかる(「#」で表す)。また、心理的事態を表す動詞の間でも、事例(2)が示すように、より自然な解釈となる時制が動詞によって異なることがわかる。事例の観察からも、複合過去を好む動詞(3a)と現在形・半過去形を好む動詞(3b)と時制の選択に違いがあることがわかる。加えて、これまであまり注目されることのなかった代名動詞の心理

的用法に目を向けてみると、この用法が一部の動詞に限定されることがわかる(事例(4)、*容認不可)。

以上の点を踏まえ、本研究ではアスペクト分析に基づいて心理・感覚動詞の意味構造の考察を行い、内的経験がいくつかの異なった事態認知パターンに基づいて意味付けられることを明らかにしてみたい。